
How To New World

イチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

How To New World

【Nコード】

N1579Q

【作者名】

イチ

【あらすじ】

研究者。それは知を探求する者。

とある怪しい天才科学者と助手の青年が完成させた異世界へ移動する為の機械。なぜか異世界に行くのはその助手だった!?

この機械が量産されれば異世界旅行も夢じゃない!!

だったら異世界のガイドラインを作っちゃいましょう!!

How To! 新しい世界へようこそ!!

プロローグ・始まりの始まり

「博士っ……やりました……」

「やったな……白川君っ……」

薄暗い部屋の中、博士と呼ばれた六十代位の老人と、白川君と呼ばれた二十台前半の青年が涙を流して喜んでいた。

目の前には巨大な機械が置いてあり、人間がすっぽり入るようなガラスの筒が中央に据えてある。

「後は人間の実験だけです博士。バイトでも雇って実験に協力してもらいましょう。なんせこの機械は『異世界』へと移動できる機械なんですから、そこらへんの中学生か高校生に言えば、嬉々として行ってくれますよ！」

『異世界』。青年、白川有は確かにそう言った。どうやらこの機械は、このガラスの中の物を異世界へと移動させる機械らしい。

すでに人間以外の物、例えば通信機などは試しに送っており、あちらの世界からこちらの世界に、この機械を通して電波を送っている。電波状況が悪いのか断片的にしか言葉が届いていないが、解読した結果どうやら魔法のような物があちらの世界にはあるようだ。

これによって、一気に異世界の可能性が高まり、異世界肯定派の白川としては、数年にわたる研究の成果がようやく実現したと感じて涙を流している。

しかし、ここで博士からとんでもない一言が飛んできた。

「何を言っておる。行くのは君だよ、白川君」

「……は？」

白川有は確かに異世界の存在を肯定していた。しかし、自分で行くとは思っていなかったのだ。

それよりも、異世界の物質やら通信機から流れてきた魔法とやらの研究の方が重要だと考えており、行くのは別の人間だと思っていたのだ。

「な、何を言っているんですか博士……。私はここで研究をしなくては……。異世界に行くのには別の人間を行かせてればいいじゃないですか……」

「そちらこそ何を言っておるのかね。あちらに人体を飛ばせるのかどうか実験をした時、君の髪の毛を使ったではないか。その時君の遺伝子情報を登録してしまったから、この機械はいわば君専用の転送機になってしまったのじゃぞ」

「う、嘘ですよね……。博士……」

「本当じゃ」

「うそですよねええ、はかせえええ」

「じゃから、本当だと言っておる」

「う、嘘だあああああ！！」

頭を抱えながら絶叫する男、白川有、二十四歳。これが受難の始まりだとは何となく気付いていた。

ブログ・始まりの始まり（後書き）

批評、応援、罵倒、なんでも受け付けておりますので、忌憚無き意見を下さい。

一話・始まりの終わり

「ウェスベール隊は下がって援護しろ！　ここは、私達ラングロツサ隊が突入する！」

「魔導兵は右側を狙え！　ええい、弓兵共！　どこ狙ってやがる！」

「けが人はさつさと下がれ！　邪魔だ！！」

白川有は、戦場を見下ろせる丘にぽつんと一人、呆然と立っていた。

眼下には戦場。怒号を放つ数多の鎧を着た人、それに対するは、赤い鱗を持つ一匹の巨大な竜だった。

「いやいやいや、こつち来て始めてみる光景がこれとか、お兄さん挫けちゃうよ。はは……」

話しは少し前にさかのぼる。

「ふむ、どうしても行きたくないのかね？」

博士が諭すような声色を使って助手に話しかける。

「いや、どうしても行きたくないというわけではありませんが、私は科学者ですので、あちらに行くよりもここで研究していた方がいいと思います。それに、私みたいな非力な人間が行ったとしても大して役にはたちませんよ」

「科学者は体が資本だからと言って毎日筋トレをしてるではないか」

失敗したと明らかに顔色を変える青年。さらに博士は追い詰めていく。

「それに、あちらの物をなんでもこちらに送って来ても困るだけじゃ。それなりの知識のある人物が行かんと話にならん。きちんとした研究対象を判断して、それなりに体力もある若者を探すのには苦勞するじやろう。ならば白川君が行くのがベストだとは思わんかね？」

「で、ですが……」

まだ洩る助手に対して、博士は最終手段を出す。

「そういえば白川君は恋人などおらんのかね？」

「え？ は、はい？ えっと、恥ずかしながらここ数年は研究所と家を往復するばかりでそちらの方はさっぱりでして」

博士は、にやりと意地の悪い笑顔をすると言葉を続ける。

「そういえば、この前、孫が友人を連れてきておつての。それはそれはめんごい女子^{おなご}じゃったよ。ほっほっほ。ちなみに優秀な助手がいると言ったらの、それはそれは興味津々でのお」

「博士、何をしているんですか。早速取り掛かりましょう。異世界に行くには準備が必要です。早く対策を立てなければ！」

機敏に準備に取り掛かる助手を見て、博士は黒い笑みを見せる。ちなみに博士の孫は現在十歳で、友人も同い年。助手はその事を知らないのであった。

「待ちたまえ白川君。準備はほぼこちらで終わっておる」

「おお！ さすが博士です。準備万端ですね」

「お世辞はいいからこちらへ来い、使い方を教えるのでな。マニュアルも入っておるが、一度使い方を説明しよう」

そして取り出したのは大き目のリュックと手で持てる簡易テントであつた。

「テントの使い方は分かるな。ボタン一つで展開する。後はリュックの中身じゃが」

そして、筒状のものと銃状のものを取り出す。

「まずは筒状のこれは、スタンロッド。手元のボタンとポリウムで威力を調節できる。護身用じゃ。最大出力でクマ程度なら一発じやの。銃は、その遠距離バージョンじゃ。こちらは威力の調節が出来るので常に最大出力じゃの。くれぐれも取り扱いには気をつけるのじゃぞ」

次に見せたのが、何かの機械。アンテナの様なものが立っており、リュックの横にくっついている。

「これはあちらの世界で白川君の居場所を探知できるレーダーじゃ。何か必要なものがあれば、このレーダーの座標に向かって物資を送るからの。必要なものがあればこの携帯電話を改造した通信機で連絡をよこすのじゃ」

「はあ、でもバッテリーなどはどうするのでしょうか？」

「リュックの上部にはソーラーパネルを使用しておる。横の充電器に差し込めば全ての電子機器が充電可能じゃ。それに、その携帯は白川君が歩いた場所などを記録していき、自動で地図を更新してくれるのう」

おお、と白川が思わず唸るほど、博士は準備万端であった。

「そして、重要なのがこの箱じゃ」

取り出したのは手の平に乗るほどの小さな箱。

「これに送りたい物を入れて、横のボタンを押すとこちらの世界にその物が転送されるぞい」

「えっと、この大きさですと大した物は送れませんか？」

「心配するな。この横のボタンを押しながら入れれば、人間程度の大きさならこちらに転送できるのう。ただし、生物は白川君以外送れないので気をつけるのじゃよ。すでに死んでいるものなら送れるがのう」

どうやらいざとなったらこれで戻ってくるらしい。半信半疑ながらも彼は受け取った。

「あ、これらの電子機器は白川君以外に使用できぬようにロックがかかっておるからの。あちらの世界で他の人に悪用されぬように用心したまえよ」

そして、その他こまごまとした発明品やお金の代わりの貴金属を説明して準備は終わった。

「いよいよです、博士」

「いよいよじゃな、白川君」

二人はガラスの内側と外側に立ち、歴史的瞬間を噛み締めていた。そして、博士が機械を操作すると、

「では行くぞ！ 白川君」

「行ってきます！ 博士！」

白川有の姿は、その荷物と共にこの世界から消えた。

「頼んだぞ、白川君」

後に残った博士の呟きは、誰もいない部屋に響いた。

そして冒頭だ。

出発してわずか一分。青年白川は早くも後悔していた。

二話・竜と騎士と見る人

眼下には怒号の衆。

対するは赤き竜。

いくら飛んだ先が異世界だと知っていても、寸前まで地球と言う場所で平和に暮らしていた彼にはその光景はどこか現実のものとはかけ離れているように見える。

しかし、そこは根っからの研究者体質、数瞬の後悔と共にすぐさま行動を起こす。

「サンプル、サンプル」

そのままでは眼下に見える人、もしくは赤い竜に見つかってしまうと思い、すぐさま近くの木に隠れると、まずは地面の土を掘り、先ほど博士に渡された箱の中に入れる。

「博士、博士、聞こえますか？ とりあえずこちらの土のサンプルを送ります」

「……こえている……に届いた……解析……待つ」

どうやら通信状況はそれほどよくないようだ。しかし、断片的に届いた情報により確かに届いたと確信し、次いで先ほどから気になっている戦いの様子を見物するように木陰から人对竜の戦いを見つめた。

「っ……分が悪い……！」

先ほどから戦っている目前の竜に対し、馬上で指揮をしている一

人の騎士が呻く様に声をあげる。幸いな事に周囲では竜に対して声を張り上げて突撃をするだけの兵士しかおらず、彼の後ろ向きな発言は誰にも聞かれる事は無かった。

「何か……何かきつかけがあれば……」

彼は焦っていた。竜を倒すと意気込んでいる兵とは違い、彼は冷静に物事を考えていたからだ。

この戦い、負けるかそれとも追い払うかの二択だろうと彼は思っている。現実問題竜を倒せる人など伝説に登場する人物しか存在しない。大多数はちくちくと嫌がらせの様な攻撃を与えて、竜の住処へと戻ってもらうしかないのだ。

「くそつ、あの貴族共のせいだ！」

元々辺境のこの地に竜が現れたのも、馬鹿な貴族が周囲の環境を考えず、大々的な魔物狩りに乗り出し、血のにおいが撒き散らされた結果だった。彼はその貴族に何の義理も無いが、その地に住まう住民は別だ。

馬鹿な貴族に巻き込まれた一般の住民。元々弱者を守る剣として騎士となった者達にとって、この竜退治は当然の事だった。

その中には冷静に竜を退治できないと考えている現実主義者もいれば、自分の剣が彼の竜を貫くと信じてやまない英雄思考の騎士もいた。しかし、その大前提として住民を守るという意思是統一されているのである。

「せめて少しの間でいい……魔導師隊が大規模魔術を唱える隙さえあれば……」

そんな風に彼が思っている間にも、眼前では竜の攻撃によりけが

人が増え、もはやこれ以上の損害は敗北と同じことだ。

必死に頭を回転させ、常に最善の選択を模索する。彼は、自分のそんな光景を見つめる人がいるとは思ってもよらないだろう。

「おー、なんか鎧着た人たちと竜？ ドラゴン？ 西洋っぽいからドラゴンかな？ あー痛そう。なんかすごい吹っ飛んでるし。どんな理屈であんな巨体で空飛ぶんだろ？ やっぱ魔法かな？」

同じ光景を十分も見ていると慣れてくるもので、血なまぐさいこの光景も余裕を持って見れるようになっていた。

「あの鱗、何とかして手に入れたいなあ」

先ほどの言葉から幾度の激突があつたことだろうか。

それだけの交戦があつたにもかかわらず、かの竜の鱗にはヒビすらはいっていない。

「あれだけの硬度だとどれ位の強度になるんだろう？ 最低でも鉄よりも硬いよなあ」

最初はあれだけ硬いともはや鋼鉄並だろうと考えるが、それでは通常時の生活で不便が出るだろうと思ひ直す。

いくら竜だとして生物。竜なりの日常がある事を考えれば単純に硬いだけではないだろうと行き着く。

「やっぱり調べてみたいなあ、誰か鱗の一枚でも剥がれるほどの攻撃をしてくれないかな？ って、うお？」

どうやら戦場に動きがあつたらしい。今まで乱戦の様相を呈してきた戦場だったが、どうやら戦闘に加われる騎士の数が少しずつ減

つてきていたらしく、一部に密度の薄い箇所が出来たようだ。

狙ったか偶然かは分からないが、その場所を攻撃された騎士たちは、今までに無い規模で負傷者が増える。

「これはあの騎士たちの負けかな？」

敗戦濃厚と言うことで、もはや竜の鱗を手に入れるのを諦めた彼は、その場を後にしようとした。

しかしそれは叶う事がなかったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1579q/>

How To New World

2011年3月7日23時10分発行